

第18話（9頁） カラスと水さしと小石

ガラスが飲み物をさがしていました。庭に水のはいった水さしがおいてありましたが、水さしの水はそこのほうだけでした。カラスにはとどきませんでした。カラスは水さしに小石を投げ入れはじめました。しばらく入れていると、水がのぼってきて、こんどは飲むことができました。

「これは、『イソップ物語』にも出ていて、例えば、『危機にあっても、知恵を使うことで危機を脱することができる』とか、『必要こそ発明の母である』と締めくくっていた。教訓ものとしてよく知られている話だよ。」

「もちろん、『アーズブカ』には、そんな教訓は付いていないし、文章も極端にそぎ落とされている。カラスはのどが渴いていた、あるいは、最初に水瓶を壊したりひっくり返そうとしたりしたが無駄だった、といったような状況説明も一切ないからね。」

「書いてはないけれど、子どもたちには自分で、そういう教訓を引き出させようとした、ということか。」

「実は、カラスは本当にこういうことをするんだという英語の論文が、あってね（“Current Biology” 2009年9月号）。カラスは石を使って水面を上げ、浮かんでいる虫を捕らえると書かれていた。」

「へえー、驚いたね。となると、トルストイは『アーズブカ』で淡々と事実を書いたのかもしれない、ってわけか。」

「自然観察もトルストイ教育の特徴の一つだ。カラスの生態、賢さを子どもたちに教えようとしたとも考えられる。」

「興味深い解釈だな。それにしても、小石はどのくらいの大きさをどのくらいの数、水差しに入れたら目的を達せられるんだろうか。」

「そんなに突き詰めてどうするんだい。せつかくの話が味気なくなっちゃうよ。」

<参考>

『イソップ寓話集』（中務哲郎訳、岩波文庫）の<嘴細鳥（はしぼそがらす）と水差>（290頁）では、「このように、知恵が力を凌ぐのだ。」と結ばれています。